

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2020年10月

No. 76

～ 1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)



2020年9月の報告

- 2020年3月～2020年9月 国内では、英語の本・算数セット・サッカーボールを収集、分類・梱包作業
- 3月～5月 コロナ禍のため、国内の梱包作業中止
- 3月 国内メンバー 南ア渡航 現地視察訪問
- 3月～6月 南ア、コロナ禍のため、学校閉鎖
- 6月 一部の学校から少しずつ授業再開
- 3月～9月 南アでは、状況を見ながら本の配布や一部の貸し出しを行う

目次

• ロックダウンの下での活動（平林薫）	2
• ドウェシュウラ学区の学校図書プロジェクト（モンドリ・チリザ）	5
• 2019年度活動計算書	7
• 農業塾のザマさんからのお便り（ムサンデニ・ザマ）	8
• 南アフリカにサッカーボールを！（小野崎研郎）	10
• 活動日誌	11
• 寄付金や本などを下さった方々	12



カラフルなマスクをつけて本を借りにきた子どもたち

ロックダウンの下での活動

平林 薫 (TAAA 南アフリカ事務所)

学校閉鎖

3月初旬の久我代表と大友さんの現地活動視察訪問時にはまだ“対岸の火事”のように思っていたコロナ感染が3月中旬には南ア国内でも急激に広がり始め、3月27日、南アフリカではコロナウィルス蔓延防止への対策としてロックダウンが発動された。学校は第1学期終了間近で、先生方は学期末テスト後の採点等に追われているところだった。その時点ではロックダウンがどのくらい長引くのか予想もできず、“イースター休暇に入ることだし、休暇後には通常に戻れるだろう”くらいに考えていた。当時、まだ感染者は少なく、海外旅行から帰国した人たちが中心だったので、遠隔地域に住む私たちには全く実感がわかなかった。ロックダウン・レベル5は基本的に外出禁止で、必要最低限の食糧・日用品を一番近くのスーパーマーケットまで買いに行くくらいだった。スーパーの中は ものものしく、皆マスクをつけて無言で、うろろろする人や立ち話をする人が全くいないと言う異様な光景が広がり、不思議なもので、まるでそこにウィルスがいるかのような気持ちになり、買い物が終わるとさっさと帰宅していた。国境はもちろん、州境も閉鎖され、車の往来もほとんど見られないほどの静けさが怖さを倍増させたとも言える。一日中テレビをつけて情報はニュースに頼ったのだが、このような状況下、報道に携わる人たちの使命感、勇敢さは本当にありがたかった。そして何より、感染の最前線で働く医療関係者の活躍は想像をはるかに超えるもので、感謝の気持ちでいっぱいである。結局ロックダウン・レベル5は4月末まで続き、5月にはレベル4になったが、引き続き厳しい規制があり、学校も閉鎖されたままだった。



閉鎖中も本配布の許可をシンガ議員に交渉する筆者（左）

前回の会報75号で新規図書事業や対象地域であるドウエシューラ学区についてお話ししたが、3月まで活動は順調に進んでいた。イースター休暇明けの第2学期には、読書推進ポスター作りやブックレビューコンテストなどを予定していたので、ロックダウンによる学校閉鎖はとても残念だった。何より、この“超長期休暇”中に生徒が読書できるよう、本の貸出しをしっかりと行う準備の時間がなかったことが悔やまれる。対象校の生徒たちは家庭に本も教科書もなく、インターネット授業など夢の夢、という状況にあり、学年によっては5か月間全く勉強をしていない生徒もいる。今後、全学年が復帰してもしばらくは学校生活のペースを元通りにすることで精いっぱいになりそうだ。



チョペラ小図書委員会が貸し出しをする

学校閉鎖の中で本の貸し出し

このような環境下にある子どもたちや地域住民にも本を読んでもらいたいが、現状では巡回貸出しのような形も難しいことから、本を配布する機会を作りたいと考えた。準備にあたり地区のシンガ議員と相談し、ドウエシューラ学区内のオシャベニ・コミュニティセンターを使わせてもらうことになった。レベル3の6月は、まだセンター自体は閉鎖中であつたが、毎週水曜日に保健省の巡回クリニックがあるとのことで、私たちの活動も水曜日に決定し、案内のポスターとピラを作成して周辺に貼り出した。第1回目の6月10日は、まだ地域住民が外出を控えていることや、配布の案内が行き届いていなかったこともあり、訪問者は少なかったが、クリニックに来たお年寄りが自身の読書や孫のために喜んで本を持って帰ってくれた。2回目の17日と3回目の24日は人づてに聞いて本を受取りに来た地域住民や子どもたち、周辺の学

校の教師などの姿が見られるようになり、両日とも地域住民20名、子どもたち90名ほどの訪問があつた。子どもたちは近くの対象校チョペラ小の生徒が多く、高学年の生徒には読書感想文を書くよう伝えた。普段はなかなか学校の外で住民と知り合う機会はないのだが、今回、本の配布を通して生徒の家族や地域の若者たちとも交流できたのはとてもよかった。

ロックダウン中の生活はもちろん不安もあり、不便なものだったが、少し立ち止まってこれまでの活動を振り返ったり、これからの活動や社会について考えたりする時間となった。日本から送っていただいた本についてもゆっくりと各校の状況や生徒の興味などを思い出しながら仕分けをすることができた。日本についての本を見つけると、日本や日本語に関心を持つウマルシ小の女子生徒たちの顔が浮かび、“楽しんでもらえるかな”と思いながら箱に入れた。

また、サッカーの練習本が出てきた時はメシヨムンヤマ小のサッカー少年たちのことが思い浮かんだ。学校が再開となった際、サッカー練習本を校長に渡すと大喜びで、サッカークラブ生徒全員に読ませると早速コピーを取っていた。通常では各校に本をそのまま配布して、司書教師と図書委員会生徒が受取り登録を記入するのだが、今回はオフィスで登録作業をしてから配布し、すぐに本棚に設置できるようにした。

日本から届く英語の本の多くはレベルが高く、英語を母語とする生徒であれば小学校高学年が利用できるような本でもこちらでは高校生用となってしまう。小学生用の素敵な絵本もあるのだが、小学校の対象校数が多いことや、母語のズルー語の本も必要であることから、現地書店での購入も行っている。高校には日本からの英語の本に加え、教師からのリクエストをもとに教科に沿った参考書を購入して配布している。全学年が復帰した後、年末にかけて慌



コロナ対策として訪問時に問診票に記帳

ただしい授業となるが、特に小学校はあせらずに読書を楽しむ機会を取り入れて欲しいと思っている。今回も算数セットをたくさん送っていただいたので、パーツを揃えて配布準備をした。算数が苦手な生徒たちが、楽しみながら基礎を学べる機会になるだろう。校長や司書教師と相談しながら、各校の方針やニーズに合わせて活動を進めて行きたいと思っている。

6月から少しずつ登校再開

6月からレベル3に緩和され、6月8日から7年生と12年生のみ登校再開となった。基礎教育省からは当初6月1日に学校再開との発表があったが、遠隔地域のほとんどの学校には水道が敷かれておらず、トイレの設備も悪く、山間部の過疎地帯の学校を除いて教室は生徒で満杯状態と、コロナ対策には最悪の状況であるため再開準備に時間がかかり、1週間延期となった。各校ではマスク・検温器の手配、手洗い・殺菌用設備の設置、一つの机に生徒1人（1クラス15名程度）という“ソーシャルディスタンス”のシステム作り、全教室の殺菌等準備に追われた。8日朝、対象校のマンガズカ高校に到着すると、校内に入るための生徒の長い行列が見られた。検温と殺菌消毒に時間がかかっているようだった。校門に入ろうとすると“部外者は訪問禁止です”と止められてしまったため、持参した参考書を渡してオフィスに戻った。すぐにザミサ学区長に連絡して確認したところ、私たちの活動に制限はないとのことだったのでほっとした。再開初日は学校側もかなり混乱していたのだ。

12年生はロックダウンで遅れた時間を取り返すべく、高校卒業試験に向けた特別授業に取り組んでいる。そのため、図書室で調べ物をする以外はゆっくり読書をする時間がないようだ。7年生ももちろん授業が忙しいとはいえ多少余裕があるので、準備が整った学校から図書室での本の貸出しを再開した。TAAAは図書室再開にあたり、各対象校に利用者用殺菌消毒剤、箒とハタキを配布、また、返却本用の箱を作り、本を消毒してから本棚に戻す作業を行っている。小学校も高校もそれぞれ1学年のみの登校で、生徒にとっては図書室をゆっくりと利用できる機会となり、早速本の貸出しを積極的に行った学校もあった。ただ、対象校の中には図書室の利用がウィルス拡散につながると考える学校も1校あり、これについては学校側の判断に委ねた。図書室利用を再開した学校では“待ってました”とばかりにやってくる生徒の姿が見られた。入室前の手の消毒、マスク着用、ソーシャルディスタンス等が図書委員会生徒のリーダーシップと責任の下で行われていたのは頼もしかった。しかし、タイミングの悪いことに南アは6～8月が冬で、通常でも風邪をひく人が多い時期であることから、この再登校後に感染が広がってしまった。7月後半、全国的に感染状況が悪化し、学校では教師の感染の広がりも見られるようになったことから、7月24日から1か月間、再度閉鎖となってしまった。12年生と7年生は早めの復帰となったが、その頃には生徒の感染も見られ、学校は閑散とした状態だった。8月24日から基本的に全校生徒の復帰となったが、ソーシャルディスタンスのためスペースが足りないことから、現時点でもまだ復帰できていない学年もある。学年ごとに登校する日をローテーションにしているのだが、当然生徒数の多い学校ほど登校できる日にちが少なくなる。ローテーションの組み方は学校の状況によって変わってくるため、生徒一人一人の授業時間や内容に大きな差が出てしまう。また、基礎教育省は感染の有無にかかわらず高齢または持病のある教師を自宅待機にさせているため、各校で教師数が不足しており、結局、生徒は登校しても自習という状況が見られる。小規模な学校ではある程度教科書に沿って急いで授業を進めていると言うが、対象校のマンガズカ高校は10～12年生の3学年で生徒数640名と多く、対応に苦慮している。すでに全校生徒に各科目のコピーが配られ、その内容のみを学ぶ（教える）というシステムを取っている。ローテーションにより、生徒によっては再登校できるのが9月末になると言うが、このような状況下で確実に進級できるのか疑問が残る。来年度同じ学年を繰り返させるという案もでているが、ロックダウン中もネット授業などを取り入れて生徒が勉強を継続していた学校もあるため、線引きが難しい。年末の高校卒業試験、大学や専門学校への進学についても大きな混乱が予想される。しかし何より、今は生徒一人一人の心のケアが必要ではないだろうか。もう学校に行きたくない、行かない、という生徒もきっと出てくるだろう。生徒たちにプレッシャーをかけず、毎日生き生きと過ごせるような環境作りが必要であると思う。あせって教科書の内容を詰め込んでも、途中で躓いたら結局その先に進めなくなってしまう。また、この機会にカリキュラムを再考し、実習の授業や課外授業にも力を入れて欲しい。

教育の中に読書革命を起こそう

今回、このコロナ禍により活動の中断や新しい形での再開を余儀なくされたが、学校の抱える問題を改めて目の当たりにし、そのような状況下での教育のあり方についても考える時間となった。学校閉鎖が長引くにつれ、家庭に本のない子どもたちは読書ができないという現実にもどかしさを感じた。学校再開後、環境も生徒たち自身もまだ落ち着かない状況ではあるが、あせらず、生徒がまず本に興味を持ち、読書を楽しむことで次第に習慣となっていくことを目標として活動を進めている。生徒の心のケアにも一役買えるような活動ができればと考えている。事業のカウンターパートである州教育省図書部門（ELITS）のンベレ氏から、モチェハ基礎教育大臣が学校関係者に送ったビデオメッセージが届いた。メッセージのタイトルは“National Reading Coalition-Let’s get South Africa reading（南ア読書連合一人々に読書を推進しよう）。子どもたちに読書能力をつけさせるため、学校はもちろん、家庭やコミュニティにおいて“読書文化”を作り出す重要性について話し、“教育の中に読書革命を起こそう（Let’s create reading revolution）”と訴えている。私たちがこの“読書革命”の担い手として活動を続けていきたい。



入室時に記帳する



入室時に手の消毒

4月より、ひろしま祈りの石財団の助成でドゥエシューラ学区フランランド小への図書活動支援を行うこととなった。同校は現行事業の対象校であるナニ高校の近くであるが、対象校12校から外れてしまっていた。ナニ高校の図書室が完成した時に校長や教師が見に行き、“私たちにも機会があるといいね”と話していたと言う。校内には図書室に改装するためのスペースがないことから、コンテナ図書室を寄贈することになった。ロックダウンのため活動に少し遅れが出たが、コンテナの配備が完了し、本棚と蔵書の設置に取り掛かっている。校長も教師も関心と意欲を見せており、これから同校での活動が楽しみである。

ロックダウン・レベル2になった現在、経済回復に向けあらゆる業界で規制が緩和された。お酒の販売も再開し、当然酔っ払いも再びうろろし始め、また車の往来も増えたことから犯罪率も交通事故も“通常通り”になりつつある。ロックダウン中には、

南アの人々の生活の中での様々な問題（住居・職・衛生・学校の設備等）が改めてクローズアップされることになった。タウンシップやインフォーマル地域に住む人々にとっては“家の中に居ると言われても、水道もトイレも外で共同、密集したこの場所でソーシャルディスタンスなど無理”なのであった。これらの問題はもちろん以前からあったことで、コロナ禍において現実が浮き彫りになった形だが、本来“地方自治体がとっくの昔に改善していたはず”であり、人々の怒りは爆発寸前だ。また、ロックダウン中、警察や軍の過剰な権力行使も見られ、“ルールを守らなかった”という理由で暴力を受けて亡くなった人もいた。本当に多くのことを考えさせられた時間であった。厳しいロックダウン中の最大の問題は人々の“食糧確保”であった。大手スーパー以外の小売、飲食、娯楽、観光業界が滞り、それらの業界を支えている多くの人たちの生活が不安定な状況となった。タウンシップやインフォーマル居住地域では、このような業界の、底辺ではあるが最も重要な仕事をしている人が多く、かつまた家庭での唯一の収入源である場合が多い。もともと失業率が大変高い南アでは、運よく職に就けた家族1人のそれほど多くない収入に全員が頼っているケースが見られ、ロックダウンで“明日の食糧もない”状況に陥った家庭には、NPOや地方自治体が食糧の配給を行った。また、学校での給食が一日の主要な食事というような子どもたちが学校閉鎖でお腹をすかせているとの訴えがあり、ロックダウン・レベル3以降、給食を用意して生徒に取りに来させる学校も見られた。そのような状況下で、少しでも家庭菜園で収穫があったり、畑で作った野菜を販売できたりした人たちは心強かったのではないかなと思う。もちろんロックダウン中も高齢年金や子どもの養育支援金等、社会保障の支給は継続しており、非常事態への対応として支給額の上乗せもあった。加えて失業者に月350ランド（約2800円）を半年間支給する制度もでき、現在も支給日には受給者の長い行列が見られる。確かに非常事態に社会を安定させる手段としてこのような支援は必要だろう。しかし、南アでは政府や大企業・富裕層がいまだにハンドアウトで問題を解決しようとする意識が高いように思われる。何故“自分たちの手で作ろう”というメッセージを送らないのだろうか。このような時こそ、人々の自立に向けた技術習得や実践の機会の提供が必要なのではないだろうか。

国内のニュース番組では連日、政治・経済・社会評論家が南アの現状に対してありとあらゆる分析や意見を述べているが、それらを聞いていても何かが足りないともやもやしていた。そんな時、一人の若いアフリカ人男性が“私たち南アフリカ人は、いつもメシアが来て助けてくれることを待っている。メシアはいない。誰も助けてくれない。私たちは自分たちの力で立ち上がり、力を合わせなければ何も始まり、何もよくなりません”と言いきった。思わず“その通り！”と拍手をしてしまった。このようなメッセージが人々に広く伝わり、苦難を力に変えて自立に向けた第一歩を踏み出し、新しく大きな動きになって行くことを願っている。

ドウェシューラ学区の学校図書プロジェクト

モンドリ・チリザ（南アTAAAスタッフ）

私たちが新しい図書プロジェクトを始めたのは2019年9月でした。このドウェシューラ地域は、私のこれまでの経験から、教師も生徒も地域住民もとても友好的かつ敬意に溢れていて、活動しやすい場所だと思います。彼らはいつも私たちを歓迎し、くつろがせてくれます。ここでのありがたいことは、対象校が多かった一つ前のムタルメ学区に比べると対象校が12校だけなので、それぞれの学校課題に集中的にしかも柔軟に対応できることです。ドウェシューラ学区の12校は順調なプロジェクト運営を行っており、どんな活動に対しても士気が高く、参加意欲満々です。本プロジェクトの開始当初、いくつかの学校には図書室に改装するスペースがありましたが、ないところも4校あり、それらの学校にはコンテナ図書室を設置することになりました。



モンドリ（右）とマンガズーカ高図書委員会の生徒

司書教師のためには、地域のコミュニティー・センターを使ってワークショップを開催し、それぞれの学校図書室をどのように開設・発展させていくことができるのか、その過程で私たちがどう応援するつもりかを理解してもらいました。その後私たちは各校を訪問し、司書教師と一緒に、教師、生徒、保護者で構成される図書委員会設立に着手し、まず図書室運営ルールを作る話し合いを持ってもらいました。その後、生徒たちが早速読めるように本を運び込み、図書委員会生徒のためのワークショップを実施しました。それぞれの学校の全校集会への参加を予約申し込みし、図書室の利用を奨励する機会も持ちました。その際、本の分類法と配列方法についても説明し、図書室運営ルールを大事にするようにと訴えました。対象が12校だけなので、必要な時はいつでも、ほぼ定期的に、活動が順調かどうかチェックしたりモニターする



名前は自分で書くよう勧めています

ゆとりがあります。他校と比べると活動が少し滞りがちなところには、確実に追いつけるようにこ入れをします。本学区での活動の進展状況を確認するために、日本からTAAAのメンバーが当地を訪問してくれた今年の3月、プロジェクトは各学校で丁度始まったばかりだったのですが、生徒と教師の積極的な関わり方に感銘を受けていました。ドウェシューラは農村部なので、生徒たちは都市部よりはまだお行儀がよく、他人に敬意を持って接することができます。3月末に、コロナウイルスで、レベル5のロックダウンが始まりました。学校が休校になってしまいましたが、イースター休暇明け



中高生にはブックレビューを書くよう勧めます

に行くにもマスクを付けなければならなくなりました。ロックダウン開始以来、多くの人が失業し、生き延びるのに四苦八苦しています。コミュニティーの人たちへ分けてあげられる本を準備し、6月には地域への訪問を再開しました。コミュニティーセンターを会場に使って、準備した本を並べ、子どもにも大人にも自分の好きな本を選んで持ち帰ってもらいました。プロジェクト対象校の生徒も何人か本を持ち帰るのを見かけたので、読み終わったら、ブック・レビューを書くようにと声をかけました。その後、学年によっては、授業が再開されましたが、何週間もの休校の後、もとの学習体制に戻るのは、生徒によっては困難なことのようでした。保護者によってはコロナウイルス感染を恐れて、子どもを学校へ出すことを拒んでいました。私たちは各校の図書室に本を届ける作業を再開し、その際に、図書室で使用するための消毒液も持ち込みました。

学校によっては、家に止まる生徒のために、取りに来れるようにと、昼食を準備しました。校門の外側に、容器を持って並ぶ生徒たちの列ができていました。このころ、教師が何人かコロナに感染し、さらに何人かの生徒にも広がってしまいました。いくつかの学校は、防疫のために休校にせざる得なくなりました。そんな状況下でも、私たちは図書室訪問を中止せず、進捗状況確認を続けてきました。コロナ感染防止対策の規則は守らなければならない状況が続いていますが、人々はそれに慣れてきたようです。現在はほぼ元のような活動体制に戻っています。ここのところ生徒たちは、休校で失った時間を取り戻すべく勉強で忙しくしていますが、いずれ生徒たちと一緒に活動できる日が来て、図書室がうまく有効活用されて行くようにサポートしていきたいと思います。 (大友深雪 訳)

には再開するだろうと思っていました。ところがコロナウイルスの感染が拡大し、事態は深刻になっていきました。外出を禁じられ、ロックダウンが更に何週にも渡って延長されました。こんな事は初めてなので、辛い日々を過ごすことになりました。規制は厳しく、エッセンシャルワークに従事する人以外は家に止まることを余儀なくされました。しかしこの決まりに従わない人もいて、問題な地域には、警察や軍隊が出動するという事態にまでなりました。

ロックダウンがレベル3になってからは、状況は少し緩くなりましたが、どこ



返却された本を再消毒する筆者



休校中でも校門前で給食を配る

2019年度(令和元年度) 活動計算書

(2019年4月1日から2020年3月31日まで)

特定非営利活動法人アジア・アフリカと共に歩む会

単位：円

科 目	金 額		
I 経常収益			
1 受取会費			
正会員受取会費	115,000		
賛助会員受取会費	0	115,000	
2 受取寄附金			
受取寄附金	946,564	946,564	
3 受取助成金等			
受取公共助成金	10,331,562		
受取民間助成金	1,098,000	11,429,562	
4 その他収益			
受取利息	46		
雑収入	21,208	21,254	
経常収益計 (A)			12,512,380
II 経常費用			
1 事業費			
(1)人件費			
給料手当	4,273,857		
臨時雇賃金	40,891		
法定福利費	0		
人件費計	4,314,748		
(2)その他経費			
プロジェクト物資購入費	3,400,770		
研修費	32,883		
制作費	0		
プロジェクト物資輸送運搬諸経費	540,541		
旅費交通費	362,073		
車両諸経費	946,672		
燃料費	215,124		
視察訪問費	555,841		
専門家派遣費	0		
施設使用料	1,020		
会議費	59,800		
通信・運搬費	104,678		
印刷・製本費	79,550		
消耗品費	24,028		
水道光熱費	31,611		
地代家賃	360,011		
支払手数料	0		
保険料	0		
雑費	9,705		
その他経費計	6,724,307		
事業費計		11,039,055	
2 管理費			
(1)人件費			
臨時雇賃・講師代	0		
役員報酬	0		
人件費計	0		
(2)その他経費			
会議費	10,032		
旅費交通費	4,879		
車両諸経費	63,351		
燃料費	8,000		
通信運搬費	27,358		
印刷製本費	10,985		
消耗品費	3,506		
水道光熱費	0		
支払手数料	104,451		
地代家賃	80,004		
事務所設備・修繕費	40,579		
業務委託費	0		
租税公課	1,850		
雑費	169,867		
その他経費計	524,862		
管理費計		524,862	
経常費用計 (B)			11,563,917
当期経常増減額 (A-B)			948,463
III 経常外収益			
1 固定資産売却益		0	
経常外収益計 (C)			0
IV 経常外費用			
1 過年度損益修正損		0	
2 為替差損		0	
経常外費用計 (D)			0
①当期正味財産増減額 (A-B+C-D)			948,463
②前期繰越正味財産額			5,644,750
次期繰越正味財産額 (①+②)			6,593,213

農場塾 (MOATS) のザマさんからの お便り

TAAAは、2016年7月から2019年4月の2年10か月の期間、JICA 草の根技術協力事業「有機農業塾を拠点とした農村作り」として、小学校の敷地内に有機農業塾を設立し、地域住民に有機農業指導を行ってきました。現地でMOATS (Mthwalume Organic Agricultural Training School) と呼ばれ親しまれてきた農業塾は、事業終了までにNPC (Non Profit Company 非営利会社) に登録され、事業実施期間中のカウンターパートである州環境省のムサンデニ・ザマ氏とTAAAの現地スタッフとして活躍した地元在住のグメデ氏とジュワラ氏を理事に据え再スタートを切りました。

事業引き継ぎ時に、NPC・MOATSはTAAAに一年間は四半期事業報告書を提出することを取り決めました。約束した通りに、ザマ氏から一年間4回に渡る詳細なレポートを受け取り、その都度、感想やアドバイスなどフィードバックを送ってきました。

今年8月にザマ氏から「引き継いでから一年経つので、報告書を送る義務はないのだけど、TAAAと進捗状況を分かち合いたいので」と、状況を伝えてくれる詳しいお便りが届きました。

JICA 事業期間中は、私たちは、地元のリソースを活用することを大切にし、なかでも一番大切なリソースである“地域住民”に目を向けて働きかけてきました。ザマ氏からの報告から、非営利会社MOATSは、様々な問題を抱えながらも、TAAAのやり方を引き継ぎ、地元流にさらにパワーアップして、地元の若者たちを上手く巻き込みながら、地元への根付きを深めていっている様子がうかがえます。

久我 祐子

ザマさんの報告

4月から今まで、理事の2人がダーバンでの仕事が忙しく、全員揃っての理事会が開けず、戦略会議的なものが持っていませんが、コロナ禍の中でも着実に持続・発展しているMOATSの活動について報告します。

3月にMOATSで研修を受けた最後の2グループは、レベル5のロックダウンで移動ができなかったため、電話とWhatsapp (コミュニケーションアプリ) を使ったのアドバイスで、農作業開始にこぎつけました。EDTEA (経済開発観光環境省) ウグ郡出張所/支部からの支援を取り付け、農機具と何種類かの種も確保できました。この間4つの有機農法プロジェクトとタイル張りが開始されました。



農業塾 (MOATS) の畑

<理事として関わった取り組み>

ムタルメの反対側の3箇所では、農業の始め方と何を植えたらよいかについてアドバイスしながら、新プロジェクトをスタートさせました。

ボランティア募集・指導プログラムが成功し、ボランティアたちは、実地見聞を通して、農業用の土地の探し方、農業開始に当たっての人々への助言、農業プロジェクト用の人手確保方法、農機具・種・苗確保支援への繋げ方などを修得してもらいました。5月からは、これらのボランティアたちに新旧のプロジェクト現地を見てもらいました。

ンココとムシカジ地域の新しいプロジェクトメンバー間の運営上のもめ事の処理、ムタルメ小学校の再開にあたっての校長の手助けなどしながら、MOATS内での次のような力仕事にも取り組みました。敷地内の農地の模様替え、育苗用スペースの確保、敷地清掃、門の修理、敷地内農民の指導助言者であるンギディさんと一緒に意欲的なメンバーへの土地の追加割当、敷地管理のコスト低減策の検

討などです。

2020年のミッションを「小型ビジネス農業者」「新しい農業者」づくりとし、新たに始めるプロジェクトは1ヘクタール以上のものとし、作付けにあたってはそれほどエネルギーと資材を投入しなくても長期間維持できるものにするなど自分たちの農業を菜園活動から農業製品作りへと意識変革していくことを促し始めました。未来の「MOATS 農産物」は、ほうれん草、ピーマン、チリ (赤唐辛子)、キャベツ、トマト、カボチャが選ばれました。因みに地域の伝統的産物はトウモロコシ、豆、インゲン、ジャガイモ、サツマイモ、さといもです。

まず豆とトウモロコシでMOATSの商品を宣伝するために、出荷目的で、地元の豆とトウモロコシ包装会社に話を持ち込み、乾燥した黄色のトウモロコシと豆の買い上げ合意にたどり着ける予定でしたが、コロナロックダウンで、遅れています。この出荷に合流するために新たな農業者が徐々にMOATSに参加してきています。

MOATSでタイル張りの研修を受けた研修生の一人が、この地域での初の女性タイル工として成功しており、ラジオ、テレビ、SNS 専門家などによってインタビューされています。彼女はンバリ・チリザさんです。

<ボランティアとアンバサダーたちの活躍>

コロナロックダウンの間も、MOATS維持のために大活躍してくれながら、それぞれの独自のプロジェクトでも忙しく動いてくれていました。

DJでもあり、ラジオパーソナリティーもつとめるントゥトゥコ・ミエンデさんは、MOATSでの養豚研修後、養豚プロジェクトを開始し、この様子を全国的に発信し、養豚連合会にも参加し、養豚研修の講師にまでなっており、クワズルーナタール州で独自の訓練生を育て指導にあたっています。彼はマーケティング戦略者としても注目され始めています。

3年前からMOATSのボランティアとして働き始めたトラ・ズケさんは、敷地内で健康のための運動・体操のグループ活動を主催し始め、自分の父親を敷地管理維持のボランティアとしてリクルートし、現在敷地内の鍵、リソースセンターの機器の管理も一手に引き受けてくれています。

ココロ地域のショピレ・ムンゴマさんは、ダーバンやその周辺で貸家業も営むベテランの実務家ですが、先述の豆とトウモロコシの包装（出荷）会社との交渉の初期段階を担ってくれ、出荷予定者それぞれの不備や要補填事項を指摘するのに長けており、今後ともMOATSの推進・助言者としての活躍が期待されます。私からは花栽培と生け花を始めたらどうかと提案しており、MOATS初の花屋さん誕生するかも知れません。



農業塾の建物

ンギディさんは、MOATSの活動の継続に寄与してくれています。彼はいつも敷地内で作業をしており、コミュニティ内での様々な問題点など助言をしてもらっています。ちょっとした異変等についての報告も的確で、MOATS内の農業従事者のリーダーと言えます。

今年のカボチャと豆の収穫も質・量ともに最高だったチリザさんは、自分のプロジェクトを運営し、それを新しい農業従事者のリクルート用モデルとしても活用し、地域にMOATS魂を広めるMOATS大使として活躍し、新しい農業参加者の農地に出向いて、彼らがビジネスとして農業を始められるよう支援も続けています。

コロナロックダウンで休業中だった農業従事者たちも活動を再開しており、それぞれ植えてあった1ヘクタールのジャガイモ、半ヘクタールのほうれん草、3分の1ヘクタールのほうれん草とトマトとキャベツを販売しました。チリザさんは半ヘクタールのカボチャと半ヘクタールの豆を収穫して販売しました。ントゥトゥコさんは養豚の方でも豚肉を売り始めました。

<今後の課題>

昨年12月から育苗担当者を探していますが、現時点でまだ適切な人材を確保できていません。

コロナロックダウンで現地研修しか企画できず、リソースセンターも閉じているので、MOATS施設の機能が有効活用できていません。

ココロ地域の若者たちが、MOATSの存在価値を認識し始めた貴重な時期でのロックダウンが何とも残念です。理事会としての懇談・会合がままならないことも問題です。

輸送手段の確保、MOATS有機農業者たちの産物の安定した販売先の開拓、彼・彼女らの支援要請への対応などが引き続き今後の課題となります。

(大友深雪 訳)



野菜塾の収穫物を販売する

南アフリカにサッカーボールを！

NPO 法人 浦和スポーツクラブ 理事長 小野崎 研郎

8月16日（土）、中古サッカーボール30個、空気入れ3本、交換針30本を持ち、TAAAの作業所に初めて伺わせていただきました。感染症の影響もあり、本来、作業はお休みとのことでしたが、事務局長の野田さんが対応してくださり、いろいろとお話しを伺うこともできました。

私は、さいたま市浦和区を中心に活動しているNPO法人浦和スポーツクラブに所属し、毎週末、いろいろな年代の仲間とサッカーを楽しんでいます。

私たちのクラブは、サッカーの他、テニスやヨガなどのフィットネスプログラムなど、50以上のクラスに4歳～90歳代まで約1,000名が会員として参加し、それぞれの体力や技量に応じて生涯続けることをモットーにスポーツを楽しんでいるクラブです。

コロナ禍で、スポーツ分野も大きな影響を受けました。私たちがスポーツを楽しんできた日常が、いかに恵まれていた環境であったかを、改めて思い知らされました。社会が平和で良好な環境に保たれているから、安心してスポーツを楽しんでいただけることに、感謝を忘れてはいけなと、子どもたちにもわかってもらわなければと考えています。

さらに言えば、この身の回りの平和や良好な環境は、一方で途上国の負担、ともすると国内においても経済的や社会的弱者の犠牲の上に成り立っていることを、私たちは理解しなければいけないのですが、日常生活の中では、皆が、そのようなことを考える機会を持つということとはなかなかありません。

自分たちの身近な中でこのようなことを考えるきっかけを得て、ほんの少しでもその改善に貢献する体験を共有していくために、スポーツ用具の途上国への寄付等はよい機会だと思っていましたが、受取先や配布するルートを持ったしっかりした現地パートナーがいなければ、実行に移すのは難しいと感じていました。

このような中、同じ市内に長くこのような活動の実績をお持ちのTAAAさんと出会えたことに、大きな喜びを感じています。多様な年代、多様な職業の方が参加する地域SCの特徴をいかしながら、今回のサッカーボールの寄贈をきっかけに、未永く交流させていただければと思います。



TAAA 作業場にて、小野崎研郎さん（右）と加藤ひとみさん

【日本国】 TAAA 会員とボランティア

- 3月～9月 本などの受け取りと保管と報告 北爪健一
- 3月下旬 会報送付のための住所ラベル準備 西村裕子
- 3月～4月 会報75号の編集・校正 野田千香子 西村
- 3月～9月 ホームページの更新など 渡恵美子 久我祐子
- 3月～4月 会報の発送準備と郵送 野田
- 4/6 会計確定 高野千恵美
- 4/16 オンライン理事会
- 4/19 コロナ禍のため梱包作業は中止
- 4/28 会計監査 米山周作
- 5/15 GiveOne TAAA のweb 新規ページ設定 久我祐子
- 5/17 コロナ禍のため梱包作業は中止
- 5/18 書籍等を作業場へ搬入 北爪健一
- 5/24 TAAA 南ア・プロジェクトマネージャーと ZOOM 話し合い 平林薫 久我 野田 津山直子 渡 丸岡晶 浅見克則
- 6/20 TAAA 南ア事務所とオンライン会議 久我 平林
- 6/21 本の梱包作業 久我 野田 丸岡 大友 浅見 児玉夏菜
- 6/25 N 連事業変更承認申請書 提出 久我
- 6/29 第14回国際教育協力連絡協議会(コロナ危機下の教育協力を考えるオンラインセミナー) 参加 久我
- 7/6 本の種分け作業 大友深雪 久我
- 7/13 ひろしま・祈りの石助成事業 第1 四半期報告書提出 久我
- 7/19 梱包作業 浅見 高野 野田
- 8/16 通常の作業は中止 浦和スポーツクラブの小野崎研郎さんが加藤ひとみさんとサッカーボール30個持参 野田
- 9/5 TAAA 南ア事務所とオンライン会議 平林 久我
- 9/6 本の種分け作業 大友 久我
午後 臨時理事会
- 9/9 外務省 N 連案件選定会議 久我

- 6/18 対象校5校を巡回訪問、図書室利用者用の消毒剤配布、コロナ禍状況下での図書室利用についての話し合い
- 6/19 対象校3校を巡回訪問、校長、司書教師と話し合い
- 6/22～26 対象校を巡回訪問、図書室再開準備及び利用状況確認、本の配布、寄贈用本の受け入れ登録台帳記帳等
- 6/24 ドゥエシューラ学区内オシャベニコミュニティセンターにて地域住民及び子供たちへの本の寄贈(第3回)
- 6/29～7/3 対象校を巡回訪問、司書教師および図書委員会生徒と会議、本の配布、返却本の殺菌消毒作業、蔵書の整理等
- 7/6～10 対象校を巡回訪問、返却本の殺菌消毒作業、蔵書の整理、本の配布、図書室清掃用具の配布、オフィスにて学校寄贈用本の受取り登録台帳記帳等
- 7/13～17 対象校を巡回訪問、本の貸出し手伝い、返却本の殺菌消毒作業、蔵書の整理、本・ブックエンドの配布、学校寄贈用本の受取り登録台帳記帳等
- 7/20～24 対象校を巡回訪問、本の貸出し手伝い、返却本の殺菌消毒作業、蔵書の整理、本の配布、学校寄贈用本の受取り台帳記帳等
- 8/3～7 再度学校閉鎖のため、オフィスで学校寄贈用本の受取り台帳記帳、算数セットの内容確認作業等
- 8/11～14 対象校を巡回訪問、本の配布、図書室利用状況の確認等
- 8/17～21 対象校を巡回訪問、図書室利用状況確認、本の購入と受け入れ登録台帳記帳等
- 8/24～27 対象校を巡回訪問、図書室利用状況確認、返却本の殺菌消毒作業等
- 8/28 フランクランド小にコンテナ図書室配備
- 8/31～9/4 対象校を巡回訪問、本の貸出し手伝い、返却本の殺菌消毒作業、蔵書の整理等
- 9/7～11 対象校を巡回訪問、本の貸出し手伝い、返却本の殺菌消毒作業、蔵書の整理、フランクランド小司書教師への研修会開催
- 9/14～15 対象校を巡回訪問、本の貸出し手伝い、返却本の殺菌消毒作業など

【南アフリカ共和国】 平林薫と南アフリカのスタッフ

- 3/17 山間部対象校3校巡回訪問、図書室利用状況の確認
- 3/27～5/31 ロックダウン中は本の仕分けと対象校別寄贈用箱作り、本の受け入れ登録台帳記帳作業等
- 6/4 ドゥエシューラ学区内地域住民への本の寄贈に関してシンガ議員と会議
- 6/8 学校再開(7年生・12年生のみ) 高校1校訪問
- 6/9 山間部2校巡回訪問、コロナ禍に対応した図書室用ルールやシステム作り
- 6/10 ドゥエシューラ学区内オシャベニコミュニティセンターにて地域住民及び子供たちへの本の寄贈
- 6/11 ひろしま祈りの石財団助成での新規校フランクランド小を訪問、事業内容の説明と進め方等の話し合い
- 6/12 ムタルメ小訪問、農業塾でミーティング
- 6/15 対象校6校を巡回訪問、図書室利用者用の消毒剤配布、コロナ禍状況下での図書室利用についての話し合い
- 6/17 ドゥエシューラ学区内オシャベニコミュニティセンターにて地域住民及び子供たちへの本の寄贈(第2回)

商船三井が運航した大型貨物船が7月にモーリシャスで座礁し、大量の燃料油が流出した大事故には、私たちも心を痛めてきました。この25年間、商船三井は、当時の前副社長柴山剛介氏への電話一本のお願いに応えて、その後 TAAA の南ア向けの本を積んだコンテナを毎年、横浜港からダーバン港まで無料で運び続けてくださいました。商船三井のご支援があって TAAA は長く南アへの教育支援を継続してこれてきました。

9月には商船三井は、モーリシャスの環境保護などに使う基金を設立し、10億円を拠出すると発表しました。そうした企業の社会的責任を果たす社の姿勢に私たちも賛同し、わずかですが、その基金に寄附をする所存であります。

TAAA 事務局長
野田千香子